

信頼性に基づく幸福概念の再検討： コロナ禍における フィンランドから見てきたこと

尾 崎 真奈美

要約：本研究は、新型コロナウイルス感染拡大防止に関連した様々な政策に対して、高いコンプライアンスを示すフィンランド人の語りから見てきた問題を記述するものである。オンラインインタビュー調査によると、フィンランド人は、公衆衛生上必要とされる様々な制限要請を「信頼」「従順」「忍耐」という国民的美徳に基づいて、積極的に選択しているように観察された。フィンランド国民の安定したコンプライアンスの高さは、知的で人権を尊重した成熟した態度のように見える。しかしながら一方では、行動規制と態度の同質性は、多様性の共存とは反対方向に向かっているようにも見える。フィンランドの高いwellbeingの要因として知られる信頼性の高さ・コンプライアンスの高さが、どのように個人や社会の幸福や発展に貢献しているのか、観察された結果から、心理学的分析を試み問題提起とした。

キーワード：信頼性・幸福・従順・忍耐・美徳

1. 問題：信頼の高さと幸福

幸福の定義は、専門分野や立場により様々である。ポジティブ心理学の分野においては、ウェルビーイング、主観的幸福度、生活満足度などと言い換えられたり、概念の整理も進んでいるが、本研究においては便宜的に、世界幸福度調査（World Happiness Report）⁽¹⁾の指標を採用することとする。

幸福度に大きな影響を与える要因として、経済的指標、社会制度といった外的な要因以外に、「生活に関する選択自由度」の高さ、また政府や社会、他者に対する「信

頼度」、などの心理的要因が注目されてきた。特に、紛争などによる生命の危機状態、飢餓、貧困といった、安全や生命に関わる基本的な生活条件が満たされてきた国々においては、このような心理的要因が、幸福度を決定する重要な指標となっていると言えよう。我が国の幸福度の低さに関しては、寛容度の低さとともに、この二項目の得点の低さも指摘されている。

フィンランドは、世界幸福度調査において3年連続世界一が報告されている。⁽¹⁾ 本稿においては、フィンランドの「幸福」(徳丸によれば生活満足度)⁽²⁾ に関して、その「幸福」を規定するとされる6要因のうち、「生活に関する選択自由度」と、「政治的腐敗のなさ」から推察される「政府に対する信頼」の2要因に注目して「幸福」を考察することとする。それは、コロナ禍における公衆衛生上の様々な政策により、様々な行動制限がなされ、選択自由度が狭まることを余儀なくされる状況にありながらも、フィンランド人が「幸福」であり、政府に対する信頼が揺るがない⁽³⁾ のはなぜかを明らかにしたいと考えたからである。その上で、「信頼」「従順」「忍耐」といった美德が行きすぎた国家の危うさについて、我が国と比較しながら問題提起したい。

2. 背景:フィンランドにおける「生活の選択自由度」と政府に対する「信頼度」の高さ

フィンランドが世界一幸福な国とノミネートされている要因の中で、「生活に対する選択自由度」が高いことが、高い人権尊重のあり方として注目されている。

「生活に関する選択自由度」で説明される選択自由度とは、経済的背景や出身社会階層による進学や起業などの不平等感がなく、社会進出の機会が均等に与えられているということを意味していると考えられよう。日本のように、「新卒で就職しなければいけない」「大企業に勤めて定年まで奉公するべきだ」といった暗黙の人生のルールが敷かれておらず、フィンランドでは自分の人生をいつでも自由に選択できる制度が整っている。制度が整っているだけでなく、ピアプレッシャーなど心理社会的抵抗もない。また、経済的保障がしっかりしているために、人生のターニングポイントにおいて自由に行く道を選択ができる環境にあると言えよう。実際、昨年インタビューしたフィンランド人のうち半数が、この機会に転職したり職場を変わったりしたと報告していた⁽⁴⁾。

婚姻関係に関しても、同性婚が社会的にも宗教的にも認められており、婚姻関係を持たないパートナーシップや離婚などに対しても制度が緩やかで、諸外国に比較して気軽に状況を変えやすい状況である。トイレも、性に関係なく誰でも使用できる設備

が整ってきており、ジェンダーの多様性にも寛大である。つまりフィンランドは、個性的なあり方を受け入れる自由な社会であると言えるだろう。

教育に関して言えば、教育指導要領はあるが、どんな教材を使うかはすべて現場の教師にゆだねられている。公務員である教師1人1人が自由に予算を使い、教師自身が良いと考える教育を施すことが可能となっている^(注1)。その結果、教師のモチベーションが高まり質の良い教育が可能となっている。このような選択を自由に行っている政府に対して、信頼度が高いのも当然であろうとみられる。

さらに、幸福度に関係する指標の一つである「政治的腐敗のなさ」得点も高く、フィンランド人の政府に対する信頼度の高さは極めて高いことが知られている。このパンデミックにおいても、なお信頼性の高さが報告されている⁽³⁾。

3. 現状：パンデミックにおける政府への信頼・違和感・忍耐

3.1. 絶対的信頼と違和感

2020年より世界を覆い尽くしたコロナパンデミック騒動において、政府に対する信頼度の高いフィンランド国民は、政府の打ち出す感染防止対策に対して高いコンプライアンスを示した。つまり、この福祉国家における政策は、国民の幸福を生み出すものであるという確信に満ちた信頼があるために、政府の危機管理や情報提供に疑いを持たずに、国民が積極的に従っていたということであろう。信頼度が高いために、公衆衛生上必要だと説明されて課された制限やガイドラインを、国民は積極的に遵守することを選んだのである⁽³⁾。

ある公衆衛生の専門家で公務員として働いている30代女性に、政府の方針に疑問を抱かせるようなデータを示して、このデータをどう思うかと示したところ、「様々なデータが出回っていて真相はわからないが、フィンランドの研究者はレベルが高くデータも批判的に見ている。そういう意味で政府発表のデータは信頼できると思うので問題はない。」と答えた。彼女は、これまでのように、原典に当たって確認するという科学者の基本的手順を踏まなかった。

また、30代の女性医師である疫学研究者に、世界的なデータを示してどう解釈するか意見を聞いたところ、彼女は、それを覆すような医学論文を送ってきた。それに対して、ではこの論文はどう解釈するか？と何回かやりとりをした後で、ワクチン接種の話になった。彼女は最前線で働いているため、3回目のワクチン接種もしたという。リスクよりベネフィットが大きいと判断しているからだという。

「フィンランド政府は、他の国と違って、政治家が賄賂をもらって動くようなことはありえない。全て透明に情報が公開されているから、政府発信情報や方針は正しいと判断している。全てを自分で調べすることはできないから、政府発表を信頼して従っている。」と語った。

それに対して、「メディア情報は偏っていて国民を洗脳しているようだ」（40代男性企業家）とか「大きなお金が流れていて政府が動かされている」（60代女性自然科学研究者）という語りも聞いた。

また、コントロールに対して違和感を示した小学校教師（30代女性）もいた。これまで自由に現場に任されていた様々な事柄に対し、政府からのコントロールが大きく厳しくなるにつれて、「全くフィンランドらしくない」と次のように語った。

「パンデミックになって学校が閉鎖になり、その間生徒との交流や教育に様々な工夫が必要となった。フィンランド政府は補助教師の派遣費用など多くの予算をつけてくれてありがたかった。そのために、特別サポートが必要な子供の家庭訪問も可能になり、きめ細やかな教育が可能となった。しかし一方では、公衆衛生的な見地から様々なルールが言い渡され、今までのように、現場の状況によって最善を判断して、自由に臨機応変に対応することができなくなった。これは全くフィンランド的ではない、今まで経験したことがないことだ、と驚いた。」

3.2. 忍耐とポジティブな態度

政府に対する信頼性の高さから高いコンプライアンスを示したフィンランド人は、人生満足度においてもヨーロッパを誇っていた⁽⁵⁾。苦難に対する忍耐力は、シスと呼ばれる国民性で表現されるように、黙々とロックダウンにも従って対応してきたように観察される。

医療ミスと思われるような事件に対しても、訴訟を起こすこともなく淡々と治療に専念するだけらしい。著名な音楽家が、医療ミスにより演奏活動ができなくなった場合にも、国家的な保証が大きいこともあって、問題にすることもなかったという。それは、「人間は必ず間違いを犯す、ミスはあり得る」という前提で動いているからだと言ふフィンランド人は言う。今回のワクチン副作用に対しても、自宅で薬をとって安静にするだけで、副作用が起きるのは当然と受け止め、あえて報告したり受診したりすることも少ないと聞いた（50代女性自営業）。

外出に対する自粛要請に関しては、フィンランドでは、日本と異なり戸外で過ごす自然散策などはむしろ奨励されていた。森や湖畔のサマーコテージで過ごす人たち

は例年より数倍も増加したと言われている。自然の中で家族以外との交流を経て静かに過ごすライフスタイルは、フィンランド人気質にあっていたようでもあり、幸福度が増した⁽⁴⁾ という語りも多く聞いた。

このように、フィンランド人は政府の見解に対する信頼は揺るがず、そこから生じる困難さはシスで乗り越える。公衆衛生的な見地から要請される厳しい行動制限の状況においても、その中でできることを見つけて生活を楽しんでいるように観察された。それは、コロナ禍以前からある、政府に対する信頼性の高さを基盤とした安心・満足・期待があるからかもしれない。また、社会保障制度が整っており、医療教育など様々な生活場面で政府からの恩恵を受けているために、多少の違和感には目を瞑るという心理的メカニズムが働いているのかもしれない。

4. 信頼・従順・忍耐に関する心理学的分析

4.1. 心理分析1：ポジティブイリュージョン

先が見えない危機状態においては、信頼できる何かに依存することで精神の安定を保とうとする傾向があることはよく知られている。自分では答えが見出せない状況においては、宗教的信念、あるいは権威に従うことでなんとか乗り切ろうとする。コロナ禍は誰も予測することができない、まさにVUCA^(注3)と呼ばれる危機状態である。

コロナ禍において、フィンランド人の政府に対する信頼がますます強まり、政策に対するコンプライアンスが高かったことは、危機における不安・恐怖の無意識的な回避として説明することも可能であろう。危機においては、対策の良し悪しという合理的判断が困難であることもあり、とりあえず信頼できそうなものにしがみついて安心感を得たい、というのが普遍的な心理である。また、厳しい統制に従うのは、危機管理の原則として、最悪を想定して行動すべきであると言う概念にもマッチした、合理的な判断による行動だったと言えるかもしれない。フィンランドの場合は、経済的保障が十分あり、様々な制限によって受ける経済的ダメージが少ないことも、政府に対する信頼が高い、コンプライアンスが高いことに大いに関係していると思われる。

ポジティブイリュージョンとは、現実認識が客観的には正しくない極端な楽観主義を指し、精神的健康をどう捉えるかによってその評価は一定ではない。一方では、ポジティブな信念が幸福感をもたらすこと、そのポジティブな感情が健康・人間関係などに良い影響を与えますます幸福感を増していくことが、ポジティブ感情の拡張生成論として知られている⁽⁶⁾。ポジティブイリュージョンの非現実的思い込みが健康に貢

献するということは、ワクチンなどの薬害に対するプラシーボ効果と言い換えることもでき、パンデミックを乗り切るための一つの態度と言えるかもしれない。すなわち、自らの楽観的信念を守るために、あえて現実認識しないことによる幸福追求が存在するということである。フィンランド人の信頼性の高さを押し上げている要因の一つとして、「政府が国民の福祉に反することをするわけがない」というポジティブイリュージョンがあると言えるかもしれない。

信頼、あるいは信念による安心感は、危機状態に立ち向かうときに不可欠な要素である。信頼が崩れてしまった場合の精神的危機は人格の崩壊をもたらすことがあるほど危険である。そのために、万が一疑いが芽生えてしまっても、それを探索していく態度を回避していく傾向がある。ある正直な日本人医師は「調べれば調べるほどワクチンのリスクが見えて来るので、調べることをやめた。我々は、人体実験のモルモットになって貢献することにしますわ」と笑った。つまり、真実を探索して不安になるより、ポジティブイリュージョンの安心と、貢献するという美しい心情を選んだということである。

幸福という観点から考えれば、「知らぬが仏」と言われるように、悲惨な現実を認識して絶望的な気持ちになるより、ポジティブイリュージョンの中で安心している方が得策と言えるかもしれない。時の流れによって明らかになってくる真実をどのように捉え解釈するかは、個人の立ち位置によって決まってくることだろう。心理的防衛機制は、処理できない過度の衝撃から心の健康を守るという自然の反応であるため、個人の資質によっては、事実と直面させるというあり方は必ずしも得策ではないかもしれない。ただ、専門家としては、個人のナラティブを大切にしながら、同時に事実を直視していく責任があると考えている。

4.2. 心理分析2：貢献の喜び

フィンランド人のコンプライアンスの高さを説明する要因をもう一点あげるとすれば、社会に対する貢献という高潔なスローガンがあるだろう。ロックダウンのような政策に従うのは、自分自身の感染を防ぐというより、高齢者など弱者への感染を防ぐためだという、向社会的な美しい心情から、自由より決まり順守を優先させたという声を聞くことが多い。他者への貢献はポジティブ感情を促すことが知られており、それが意味ある人生としての幸福へと導くのである⁽⁷⁾。

英国では、行動科学者のアドバイスに基づいてコロナパンデミックの恐怖を煽る政策が行われたことに対して、倫理的に許されるのかという議論が立ち上がっている⁽⁸⁾。

ヘルシンキ教会区司教のテーム・ラーヤサロはヘルシンキサノマツ紙にコロナワクチン拒否について厳しいコメントを書いた。良心の砦であるとみなされる大司教が、ワクチン摂取しない人々を非難したことによって、数百人の信者が教会を離れたことがニュースとなり、それに対する政府や他の宗教団体からの非難のコメントが報道された⁽⁹⁾。

このようにフィンランドでは、恐怖ではなく美しい心情に訴えることが功を奏しているように見える。だから、良心的で誠実な人々は、誇りに思っ政府の要請順守を選んだのであろう。そして、英国や他の諸国と同様に、結果として多くの国民は政策に従順に従った。フィンランドの場合は意図的な政策であったかどうかは未調査であるが、キャンペーン自体、その性質から心理的操作であることは否定できない。

美しい心情に訴えて心理操作することの是非に関しては、人間の尊厳や倫理観に関する考察も含めて大きな討論となるため、ここでは事実を記述することにとどめておく。

4.3. 心理分析3：「従順という心の病」

権威に従うことによって得られる安心感は、クリティカルな態度を抑制する。批判したり疑いを持ったりすることは、自分自身の精神的安定を脅かすことになるからである。危機状態において生き残るためには、心を守ることが非常に重要な課題となり、このようなメカニズムは無意識のうちに防衛規制として選択されるために、これを自覚することは困難である。グリューンは「従順という心の病」⁽¹⁰⁾で次のように説明している。

「人間は、脅され、恐怖に陥ると自分を恐怖に陥れた人と一体化する傾向があるが、これほど不思議なことはない。さらに、脅される人は、脅す人と融合し、恐怖に落とし入れられる権力者に自分の判断を合わせ、自分のアイデンティティまでも放棄してしまう。恐怖に陥った人はこういう仕方、一決して成功するはずがないのに—自分自身を救うことができると期待するのである。」(p17)

さらに、

「誠実さを、自分で選び取った道徳的な価値として感じることによって、自分を権力者と一体化する従順を覆い隠す。誠実さと従順さは両方とも権威に根差しており、その権威に対する自発的な付度が、道徳的に価値があるとか、人間的に立派な性質であると称賛される。」(p19)

として、フィンランド人の美徳の一つとも言える誠実さに対しても、その危険性を指摘している。

ドイツ人ジャーナリストのケーリングは、2011年の原発事故に関して、権威者や政府に無批判に従順になることが、日本文化の深層に根を張っている⁽¹¹⁾と指摘した。これに対してグリーンは、西洋文化の中にも無意識的な従順が明確に存在するという。ミルグリム実験^(12, 注2)を引用しながら、ごく普通の善良な市民が、尊敬の念を起こさせる人が従順を要求すると、激しく抗議することも反論することもなく、残忍な行動を要求されたとおりに行うことにも言及している。つまり、人間は権威に従うことで道徳的判断力を放棄して残忍な行動も可能となる、のである。ここで特筆すべきことは、このような服従や従順が、権威への追従や敗北というネガティブな感情からではなく、むしろ、自ら進んで選択する、合理的で高潔な態度であると当事者が認識していることである。

ここまで見てきたように、「生活における選択の自由」があるフィンランドにおいて、自ら積極的に、自由を放棄することを選択して、進んで縛られる方向に向かう態度は、フロムの言う「自由からの逃走」⁽¹³⁾を体現しているようにも見える。すなわち、現代人は「いかなる種類の独裁者にも自らの自由を進んで明け渡しかねないし、自由を捨てて機械の中の小さな歯車のような存在になることを選ぶ可能性がある。衣食住は足りているが自由は持たない。自動装置のような存在になりたがる恐れがある」フロムは、このような態度がファシズム台頭の原因であり悲惨な状況を引き起こしたと指摘している。

4.4. 心理分析まとめ：美德による管理と、人間の尊厳としての自由意志

フィンランド人の信頼性の高さ、従順さ、コンプライアンスの高さが、ポジティブイリュージョンや貢献の喜びという美しい心情に支えられているという論を展開してきた。その態度は、客観的に見れば権威に対して無批判に隷属しているために、管理されているようにも観察されるが、当事者は自らの意思による選択と認識している。確固たる信頼感のもとでは、批判的態度というチェック機能が作動せず、心理的安心感の中でますます信頼性が高まっていくことが予測される。

フィンランドの幸福が、このような、信頼できる権威に自発的に服従する中で経験される安心感に基づいているとするなら、これは心理社会的に健康的であると言えるのであろうか。精神的健康に関しては、ポジティブ感情が高い、あるいは社会にうまく適応しているという指標と共に、現実認識が明確で自立しているという条件が挙げられる。従順というのは、素直で誠実な態度であると評価されると同時に、自立を放棄した未熟な態度と説明されることも多いため、再考の必要があろう。人間の尊厳が、

自由意志を持ち、コントロールしたりされたりすることがなく、個性を自由に発揮して生きることにあるとすれば、権威に対して従順であることは、その破壊につながる可能性がある。

コロナパンデミックは、インフォデミックと呼ばれるように情報が交錯しており、世界中でVUCAの状態に陥った。人間中心の科学主義により、コントロールできるはずだ、感染をストップできるはずだ、との信念に基づいて世界中で様々な対策が行われてきた。平常時には考えられないほどの人権侵害の数々プライバシーの侵害、生活の監視、言論や行動自由の制限—によって、ウイルス感染コントロールを最優先してきた。その強硬な政策に対して、データからの陰りが見え始めているにもかかわらず、感染症対策という大義名分のもとで、行きすぎた管理社会による監視がますます進んでいる。しかもそれは、フロムが言うように、我々自らが、進んでそれを選択している。

5. 結語：優等生の危うさ

「信頼」「従順」「忍耐」という美德が行きすぎた場合のリスクについて、フィンランドの現状から言及した。これは、政府に対する信頼性が低いにもかかわらず、「従順」であり「忍耐」強く、権威に隷属的になりやすい我が国にも当てはまることであろう。

危機状態の不安や恐怖に駆られた精神状態で、権威に従ってコントロールされやすくなってしまうのは、考えることを放棄した大衆ばかりではない。あらゆる仮説や理論は反証される運命にあるという原則^(注4)を忘れて、データ解釈や理論づけを、既成の理論に合わせることにのみ専念し、都合の悪い現実を見ようとししないあり方に陥ってはいないだろうか。それは、専門家もまた、脆く弱い心を持った人間であるから、このような長引く危機にあっては当然のこととも言える。しかしながら、このような態度は科学的でも合理的でもないだけでなく、破壊的でさえある。これまでの成功体験に自信を持っている専門家こそが、無意識的な心理カラクリにおかされて真実が見えなくなってしまう危険性を指摘したい。今一度、真摯に深く自らを顧みることこそ、この歴史的な危機を、逆説的に最高の機会として、より良い社会の発展に貢献していくことができるのではないだろうか。

フィンランドは幸福世界一という栄誉に輝き、その在り方は、モデルとして称賛される傾向が強く、現在のところクリティカルな議論はほとんど見当たらない。今回、表面的な観察やデータを見るだけでは見えてこない問題を、心理学的に解明しようと試みた。限られた情報内での分析のために、結論が限定的であることは否めない。現

地でのフィールドワークができていないこと、聞き取りデータが私的なものに限定されていること、文献調査が不十分であること、また、現在も刻々と変化を続ける問題の渦中であること、などのために、包括的視野が持ちにくい。それでもなおここで問題提起したのは、緊急事態における重要な問題だとの認識からである。

注と文献

- 注1. 文献3において実行されたフィンランド人対象のオンラインインタビューにおいて収集された情報による。個人情報保護ほかの倫理配慮に関しては、対象者の同意を得ている。
- 注2. ミルグリムが行なった通称「アイヒマン実験」では、多くの人たちが、権威を持つとされる実験者の命令に従い、罪のない人に電撃を与えた。そして強い電撃を与えた人ほど自分の行為を正当化した。私たちは世界に適応するため、上位者（実験者）に、考えることを委ねてしまう。そしてそこで行った自分の行為が人として許せないものであるほど、世界とその物語を正当化しようとする心理が働く。悪名高いナチスのアイヒマンはこの状態になって何百万ものユダヤ人虐殺を行ったと言われる。
- 注3. Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字をとった危機状態を指す。
- 注4. カール・ポパー、“If we are uncritical we shall always find what we want: we shall look for, and find, confirmations, and we shall look away from, and not see, whatever might be dangerous to our pet theories. In this way it is only too easy to obtain what appears to be overwhelming evidence in favor of a theory which, if approached critically, would have been refuted.” from The Poverty of Historicism. (Ref.14)

文献

1. World Happiness Report , <https://worldhappiness.report/ed/2021/happiness-trust-and-deaths-under-covid-19/><https://worldhappiness.report/ed/2021/> (2021.10.24閲覧)
2. 徳丸宜穂(2019).「世界幸福度報告」は何を明らかにするか～分析的覚書～, トランザクション (4), 179-196. <http://id.nii.ac.jp/1476/00006647/>
3. OECD (2021). Trust survey provides recommendations for Finland on action to reinforce people's trust in government and public institutions <https://www.oecd-ilibrary.org/sites/52600c9e-en/index.html?itemId=/content/publication/52600c9e-en> (2021.10.24閲覧)
4. 尾崎真奈美 (2021).「社会距離拡大下における本質的なつながりと幸福の実現：フィンランドのオンライン面接調査より」, 北ヨーロッパ研究 (17), pp.
5. Eurofound (2020). Quality of life and COVID-19 https://www.eurofound.europa.eu/data/covid-19/quality-of-life?var=C001_01&chart_type=Bar&country_filter=Finland (2020年 5月31日閲覧)
6. Fredrickson, B. L.(2001). The role of positive emotions in positive psychology: The

- broaden-and-build theory of positive emotions. *American Psychologist*, 56 (3), 218-226.
(<https://doi.org/10.1037/0003-066X.56.3.218>) .
7. Martela, F. (2020). A Wonderful Life: Insight on Finding A Meaningful Existence, Harper Design; Illustrated. 夏目大翻訳、(2021)『世界一幸せなフィンランド人は、幸福を求めない』ハーパーコリンズジャパン.
 8. Walker, C. (2021). The Government's campaign to terrify people into compliance with Covid rules was shameless and cruel : Did anyone involved in the Government's campaign of Covid terror ask whether it was ethical to drive millions to despair?
<https://www.telegraph.co.uk/news/2021/02/24/governments-campaign-terrify-people-compliance-covid-rules-shameless/> (2021.10.24閲覧)
 9. ヘルシンキサノマツト2021年10月18日.
<https://www.hs.fi/mielipide/art-2000008340490.html> (2021年10月24日閲覧)
 10. Gruen, A. (2015). Wider den gehorsam, Klett-Cotta Verlag; Nachdruck.
村椿慶信訳 (2016).『従順という心の病—私たちはすでに従順になっている』, ヨベル.
 11. Koelling, M. (2012). Eine hausgemachte, Neue Zurcher Zeitung.
 12. Milgram, S. (1963). Behavioral Study of Obedience, *Journal of Abnormal Psychology*, 67.
岸田秀訳 (1995).『服従の心理—アイヒマン実験』, 河出書房新社.
 13. Fromm, E. (1941). Die Furcht vor der Freichit, Steinberg. 日高六郎訳 (1965).『自由からの闘争』, 東京創元社.
 14. Popper, C. (1957). The Poverty of Historicism, Routledge.

